秋夜

小論集■橋本治

秋夜

小論集■橋本治

中央公論社

秋夜小論集

一九九四年一一月三〇日　初版印刷
一九九四年一二月一〇日　初版発行

著　者　橋本　治
発行者　嶋中行雄
印刷所　三晃印刷
製本所　大口製本
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-八-七
振替　〇〇一二〇-四-三四
©1994　CHUOKORON-SHA, INC.
Printed in Japan
ISBN4-12-002391-5

装幀　橋本治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目次

I

薩摩琵琶詞集　9
城壁のハムレット
菊慈童
ヴェニスに死す
夕霧――小野の里左大将道行
琵琶の楽を愛す　17
風になれ！　歌になれ！　19

II
人生のないところに講談はない　45
即ち、俳優の肉体は画布である　68
肉体という言葉　89
III
花の盛りを舞い狂う　97
IV
女たちの物語　133
窯変源氏物語について　142

入って初めて知る、人物達のディテール　156
人と人との間の距離　159
助六の足　165
闇の美学　169
輪廻の中で人間達が苦しんでいた時代　172
突っ走るエゴイズム　182
品格ということ　188
「水」と「空気」の倒錯　196

V

大理石の色香　203
幸福な鴉　204

凪の海　219
生という半身を欠いて　233
殺された作家の肖像　253

VI

広く報らせる、公が報らせる　271
防衛庁のPR誌を読んで　276
今という時代　280
ある問いに対する答　282

秋夜小論集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

I

薩摩琵琶詞集

城壁のハムレット

曇天に、風烈々と吹き募り、北斗は冴えて雲間より、凍てる光を投げつける。夜、沈々と更け行けり。

鬱々たるは、思春の情。横顔昏きその人は、デンマークなるエルシノア、王子たる身のハムレット。今、迷い迷いて佇めり。

思えば憎き叔父王の、宴の声は高らかに、古城の壁に賑わえる。

春なお浅き庭園に、微睡みたりし先王は、毒蛇の牙にかかりしと、偽り事を盾に取り、奪いし玉座、非道の王。

母なる妃は何思う。弁舌に長けたる弟の、巧みの言葉に惑わされ、邪淫の床に堕ちたるぞ。

脆きもの、そは女なり。言うさえ悲し人の性。貞淑無二の顔容は、遊女の笑みに劣らずや。

母なる人の温もりを、慕ってつらき胸の内。

雲はおどろに垂れ込めて、巌を襲う波飛沫、雪とも乱れて砕け散る。父上御無念如何ばかりか、知るに悔しき人の世、無残。恨みは深き孤影。

血気に逸り急げども、血糊の夢に魘されて、鈍る心の不決断、懊悩に陥り、唇寒し。

安穏に堕し、事も勿れとやり過ごす。昨日に同じ今日の様。このままあるか、あらざるか、それが思案の第一と、うなずくばかりの虚しさよ。

偽りの世か、人の世は。浮世に生きる儚さに、戯れて、また戯れて、作り阿呆が何故に泣く。

風来たり、黒き闇、満ちたり。

菊慈童

七百年のその昔、周の穆王に仕えし童子、王の不興を蒙りて酈懸山に流されたり。王の恩愛ひそかにて、眠りの友なる枕の内に、二句の偈をこそ書き与えたり。すべての功徳をその身に備え、慈悲の心に人を見れば、幸い無限に満ち溢れんと、観世音菩薩の御教、谷間の菊に宿りたり。

菊の葉に滴る露は長寿の妙薬、流れる水は薬の酒、移ろう時を一炊の夢と変じて奇瑞は起こり、童子は命を永らえたり。

ありがたの妙文なりと、心を述ぶる琵琶の曲。

泉はもとより酒なれば、汲みては勧め、撥を取り、弦を掬いて弾き出だす。

月は宵の間、その身も酔に、引かれて鳴る音の嫋々と、菊の香満ちて馥郁たり。西に向かいて打ち招けば、崑崙山に住居なす、王母に傳く仙女の数々、楽器を手ん手に携えて、雲に乗

じて来りけり。

めでたかりける菊の酒。汲めや掬べや、飲むとも尽きじ、齢を延ぶる妙薬と、口に味わい、耳にも嬉しく、月光清かに輝けり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook